

季
刊



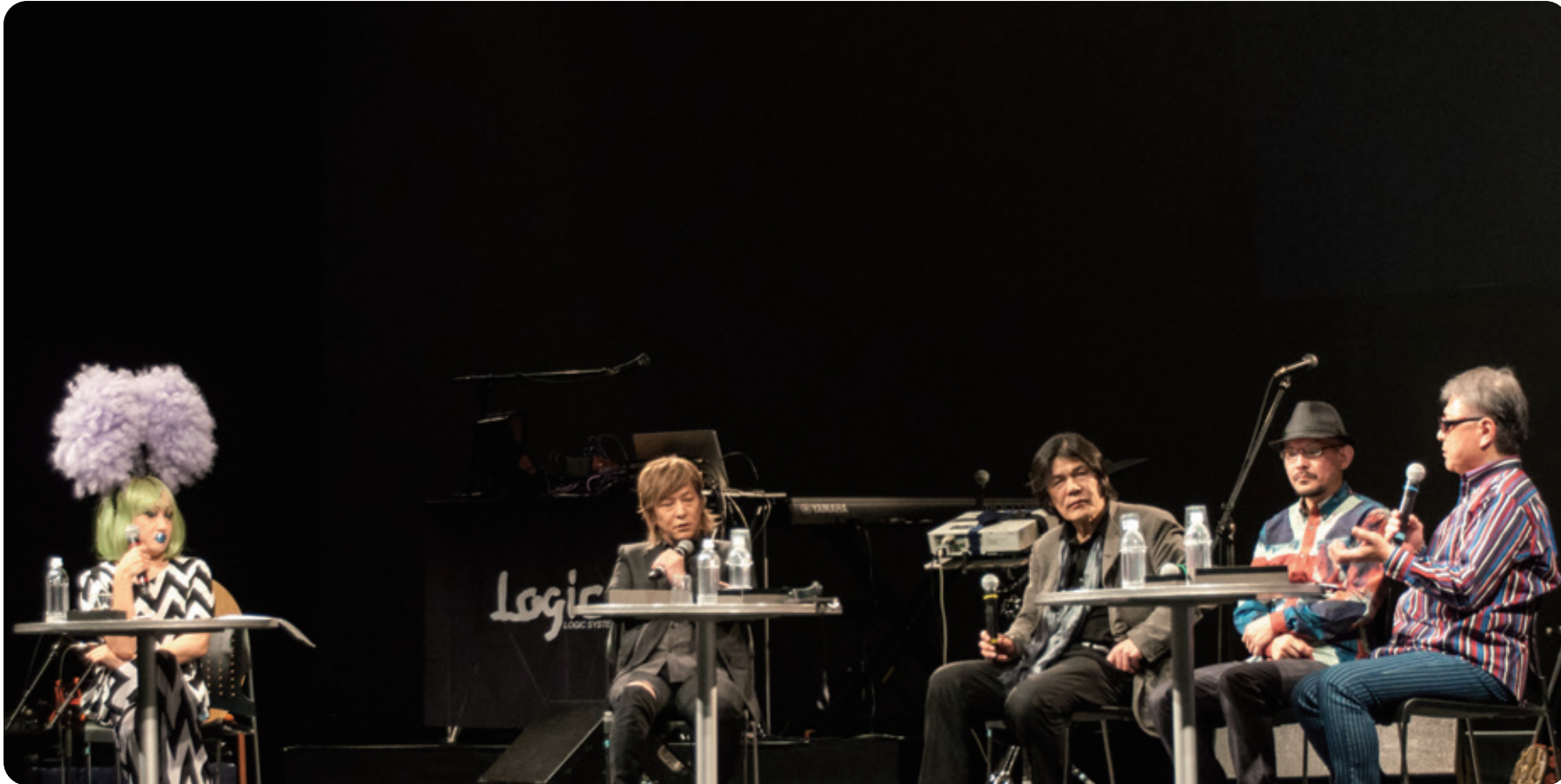
KIKAN
KADENSHA
vol.07
2017/5/1

沖縄からアーツマネジメントを考える

僕が高校生くらいの頃から、沖縄のロックは注目していました。好きなグループもいて、東京よりもっと海外に近い場所だと憧れていました。音楽に対してフレキシブルで、寛容で、国際的。同時に伝統も非常に重んじる。エンターテインメント、カルチャー、アート、伝統文化、それらはみな沖縄にあるのです。昔からある財産ですね。それをうまく使った方がいい。だから、東京で成功するんじゃなくて、沖縄のマーケットを広げるという方法がいくらでもある気がします。メディアを使うなどして。もったいないですよ。すごい素材や資質がたくさんあるのに。昔から洋楽に触れる機会が多いので、音楽については十分この街で学べると思います。マネジメントやプロデュースワークだって。

音楽にもアートとエンターテインメントの2つの側面があります。アートとしての音や映像のインスタレーションは、実験的な要素もあり場を認知させる力もある。一方、エンターテインメントは完璧さが求められるビジネス。沖縄はその両方を抱えられるところだと思います。(「沖縄県アーツマネジメント講座2016特別講座トークセッション」より)

小室哲哉 (音楽家・音楽プロデューサー)



左からヴィヴィアン佐藤、
小室哲哉、河口洋一郎、
よなは徹、松武秀樹

沖縄県アーティストマネージャー育成事業
アーティストマネジメント講座2016

特別講座 トークセッション&ライブパフォーマンス

アーティストは地域社会にどう関わることができるのか?

2017年2月19日

会場=ミュージックタウン音市場

主催=沖縄県、事務局=芸団協

協力=沖縄市、(一社)沖縄県芸能関連協議会、(一社)日本シンセサイザープロフェッショナルアーツ

沖縄県が文化芸術活動を支える人材を育てるために行う「アーティストマネージャー育成事業」。2016年度は15回にわたり企画制作、広報などの講座を行い、さらに特別講座として、世界的に活躍している小室哲哉(音楽家・音楽プロデューサー)、河口洋一郎(CGアーティスト)、松武秀樹(シンセサイザープログラマー)の各氏を招き、沖縄の実演家とのコラボライブとトークセッション(上記写真)を開催。

伝統芸能と最新テクノロジーをかけあわせると、どんなステージになるのか。期待に胸を膨らませて、300名以上の人々がミュージックタウン音市場(沖縄市)に集まった。

第1部では、よなは徹のオリジナル曲「島うた歩み節」、「美童しまうた」、「ありがとっ」のうち2曲を松武秀樹が編曲し、横目大哉(笛)、具志美沙(太鼓)とシンセサイザーとのコラボレーションとなった



第3部では、佐辺良和、知花小百合の琉球舞踊の動きに連動した河川洋一郎研究室のCG映像がバックスクリーンを彩った(上)シンセサイザーでアレンジされた「花」を歌うひがけい子(右)



第2部トークセッションでは、よなは徹(歌・三線)氏から沖縄における演奏活動の問題意識が出され、生物の進化をテーマにCGを制作している河口氏が、「カラフルな生物、絶滅危惧種が多い沖縄は進化の宝庫。ただ、同種だけで集まっていると、全部セットで絶滅することがある。異文化を持ち込んで生き延びるのは芸術的にも大事」と島の特殊性に言及。小室氏からも、素材はたくさんあるから、コミュニティで小さくまとまってしまうもったいないと語られた。松武氏からの日本の文化予算の低さへの指摘については、地域振興・地方創生のなかに文化芸術の振興を組み込んでいる都市もあり、それには行政が動いていると事例も紹介された。行政を含め、広い視野を持って文化芸術を活用する人材の育成が要だと、示唆に富んだトークとなった。

第3部では、沖縄の伝統的な曲「永良部シュンサーミー」、「汗水節」、「花」のスペシャルバージョンが披露された。松武氏の編曲・シンセサイザーに小室氏のキーボード、沖縄の三線、笛、太鼓、そして歌。感性がぶつかる生の音楽に、琉球舞踊と連動したCGアートが視覚的に広がった。立ち会った客席の多くは、沖縄の実演芸術を支え、これからをつくっていく人々。沖縄の今後に期待がかかる。

「アーツマネージャー育成事業」は、沖縄県が県内のアーツマネジメント人材育成を目的に実施。2013年から芸団協が事務局となり、毎年企画制作や広報などに関する講座を沖縄県内で開催し、県内外での研修派遣もあわせて行っている。2017年度の詳細は下記サイトから。
<http://www.geidankyo.or.jp/okinawa>

実演芸術の体験型観光プログラム開発事業 英語で歌舞伎音楽体験! ~Try Kabuki Music

外国人が日本の伝統芸能を学べる特別体験プログラムの第一弾。

2017年2月23日/3月11日

会場=成子天神社、芸能花伝舎 主催=文化庁、芸団協
協力=株式会社伊藤園、スタジオ七色、有限会社小林商店



まずは浴衣の着付け、
フランス、インドネシア、タイ、アメリカなど
2日間で23カ国のみなさんが初体験!



日本好きの外国人にとって温泉に入ったり、布団で寝たりする日本体験は大人気。しかし日本人でも普段手にしない三味線や小鼓を演奏できる機会はなかなか無い。しかも今、歌舞伎座等でも活躍中の若手演奏家が直接指導してくれるのだ。今回、歌舞伎を彩る音楽の一つ、長唄で使われる楽器の演奏体験プログラムが、外国人向けに英語通訳つきで行われた。



左手に指掛け、右膝に膝当てをつけ、
三味線を構える基本の姿勢から、講師が丁寧に指導

参加者はみな浴衣姿。その前でまずは講師が楽器の紹介をはじめた。「歌舞伎の三味線は風景や心情を音で表現します」といって川のせせらぎ、虫の音などを披露。ついで小鼓だが、この仕組みは世界的にもめずらしい。両側の革を張る「調緒」という紐を握りしめると高い音、緩めると低い音が鳴り、演奏中に調整して音を変化させるのだ。奏者は革を口の前に持って来て息を吹きかける。良い音を出すためには、革に適度な湿気が必要という説明が加わる。

楽器説明の後は、三味線とお囃子(小鼓、大鼓、太鼓)に分かれて楽器を鳴らしてみる。講師が付きっきりで教え、ひととおり終わると、参加者が自分の好きな楽器を手にしてパート練習。その後、全員で挑戦した合奏では、笛や三味線の艶やかな旋律にお囃子と掛け声、6名のプロの手が加わる。華やかな演奏となって、みんな笑顔が溢れる。最後はプロによる演奏。体験を経て、それぞれの楽器の特性や難しさを実感しただけに、目の前で繰り広げられる演奏にじっと見入って、耳を傾けて、真剣そのものだ。「日本の芸能をもっと知りたくなった」という参加者の声を聞いて、日本の伝統芸能を支えるのは日本人だけではないのだと感じた。

歌舞伎音楽体験ムービーを公開!
 (協力:宝塚大学東京メディア芸術学部)
<http://www.geidankyo.or.jp/>

三味線、小鼓、大鼓、太鼓
 それぞれの楽器を手に、講師と合奏



プログラム終了後は
 お土産の豆うちわにお気に入りの講師からサインを



かわいい子には旅を!視野を広げる研修制度活用のススメ

芸団協では、文化庁「国内専門家フェローシップ制度」の事務局として、音楽、演劇、舞踊、演芸、伝統芸能等の分野でプロデューサー、制作者、舞台技術者等として活動している人が、他の団体・組織で1ヶ月～半年程度の実務研修を行なうことをサポートしている。創造と鑑賞のより豊かな環境整備には、実演芸術に携わる専門人材の育成が鍵となるのだ。

劇場の設備や扱うジャンル、公演の規模によって、公演制作の現場は様々。本制度を利用して普段と違う環境で数ヶ月間研修を行なうことは、どんな発見があるのだろうか?

北海道の帯広市民文化ホールの山邊千尋さん(照明スタッフ/写真左)は、上司の勧めもあり、なんとか1ヶ月半を捻出して応募。研修先のびわ湖ホールは、オペラ公演も企画制作すれば、地域のための事業も多い。「劇場内の安全管理については、すぐに取り入れたいし、作品制作にあたってのスタッフ体制や照明づくりのヒントも得られた。

いつか自分の担当作品で学んだ成果を発揮したい」。研修を通して、次の目標がみえたようだ。

兵庫県立芸術文化センターの萬福倫子さん(演劇制作/写真右)は、世田谷パブリックシアターで研修。世田谷での稽古と公演を経て兵庫でも公演する作品に、稽古の段階から2ヶ月間携わった。「ツアー期間の受け入れただけだと短期間だけど、作品づくりは長いスパン。稽古場対応に加え、並行して動いている準備を手伝うこともでき、担当プロデューサーの細やかな気遣いに学ぶことばかり。この研修を活かして、生まれ育った兵庫ならではの作品づくりに貢献したい」と語る。フェローシップでの経験を種に地域で花開く、そんな可能性が広がっている。

国内専門家フェローシップ制度
平成29年度の詳細は下記サイトから。
<https://www.geidankyo.or.jp/renkeikoryu>



特別支援学校で取り組む日本舞踊のアウトリーチ

「しっかりお顔を見て、心をこめてご挨拶しましょう」。日本舞踊家の花柳大日翠さんが声をかける。東京都の「子供のための伝統文化・芸能体験プログラム」*の一環で実施したアウトリーチの一角だ。

プログラムは体験と鑑賞の二本立て。浴衣を着て、まずご挨拶。静かな舞、躍動的な踊り、水の流れ、女性らしさ、男性らしさ。いろいろなものに変身できる舞踊の魅力を知る。唄・三味線とお囃子ほかの生演奏に合わせて動きを真似る。最後はプロの実演を鑑賞。

学校を訪れたのは日本舞踊協会の若手精鋭メンバー。演奏も歌舞伎舞台上立つプロが中心だ。子供たちの実情に合わせてプログラムにも工夫をした。葛飾ろう学校(2/3)では、聴覚障がいのある生徒たちを前に、プロジェクターでテーマを視覚化。全く聞こえない子は少数で、補聴器と手話のサポートで、音にあわせて生き生きと踊っていた(写真)。肢体不自由教育校の八王子東特別

支援学校(2/21)では、ほぼ全員が車いす利用の生徒たち。足を使った動作ができないため、ここの体験は両手と顔・目の動きに特化。実演は、独特な歌舞伎のメイクを施し、装束を付けるところから。日本舞踊について理解を深めてもらいたい、という一心で考えられた構成だ。

ハンディはあっても出来ることを探す。実演家が子どもたちのホームグラウンドへ赴き、いつもと違う場を生む。プロの姿を間近に、ナマの音を振動として感じる。小さなきっかけが子どもたちの可能性を拓ける。さまざまな差別や格差が溢れる現代社会。芸能はそうした課題を超越できる要件となるはずだ。真剣に考え、行動することが未来を拓くことにも通じるに違いない。

*アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)が、2015年度より日本の伝統文化・芸能に触れる体験・鑑賞プログラムを、学校教育と連携した取り組みとして実施。2016年度、芸団協は、日本舞踊、長唄三味線、箏曲、演芸(落語・紙切)の関係協会の協力下で29校での実施にコーディネーターとして関わった。



福島、鳥取、熊本の各地で落語会

2011年の東日本大震災後、被災自治体と協定を結び、文化による復興のための活動を続けています。

本年2月～3月には文化庁事業*として福島県、そして2016年4月の地震で被災した熊本県、鳥取県の各地で、芸団協会員の上落語協会、落語協会、落語芸術協会とともに計36回にもよる落語会を開催しました。

*文化庁 平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業「大衆芸能実演家育成のための地方公演」



[花伝舎カレンダー] 花伝舎を拠点に展開している事業いろいろ

5/5(金・祝) 芸術体験ひろば2017

子どもたち・ご家族で楽しめる「芸術体験ひろば」。開催13回目の今年も乳幼児から小学生を対象とした演劇、音楽、伝統芸能の鑑賞や体験などの様々なプログラムを予定。校庭には空いっばいに泳ぐこいのぼり、地元町会や商店会による各種模擬店や物産販売等も。



<http://www.geidankyo.or.jp/12kaden/>

6/19(月) 実演芸術連携フォーラム

会場：代々木オリンピックセンター
芸術団体と劇場・音楽堂などの相互連携の促進をねらい、2013年より実施してきた「全国劇場・音楽堂等連携フォーラム」。実演芸術の実務者同士の人的・情報交流の機会となることを目指して、名称を新たに今年も開催。

(Tel:03-5353-6600)

<https://www.geidankyo.or.jp/renkeikoryu/>

ご支援のお願い

より良い稽古環境と子どもたちに良質の芸能体験を提供し続けること。この二つは、芸能花伝舎の運営に携わる私たちの願いです。将来にわたって持続するためには、皆様のご支援が必要です。是非、ご寄付をお願いいたします。<http://geidankyo.or.jp/support/>

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会

- 東京オペラシティ事務所
〒163-1466 東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー11階
Tel:03-5353-6600 Fax:03-5353-6614
- 芸能花伝舎事務所
〒160-8374 東京都新宿区西新宿6-12-30
Tel:03-5909-3060 Fax:03-5909-3061